

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 7 月 29 日現在

機関番号：30110

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530713

研究課題名（和文）「行為－出来事」場面におけるMENTALIZINGの発達過程の検討

研究課題名（英文）A Developmental Process of Mentalizing in “Action Contingent Social Event” Situations in Infants

研究代表者

中野 茂 (Nakano Shigeru)

北海道医療大学・心理科学部・教授

研究者番号：90183516

研究成果の概要（和文）：本研究は、mentalizing の発達起源・過程を「母親－コト－乳児」の三項関係から再考することを目的としている。資料の収集は 50 名の母子の 3、5、8、12、15 か月時点でのやりとりの縦断観察によった。結果から、3、5 か月では「子：物を見る（ILO）→母：同じ物を見る」、8 か月では「ILO→母：物をドラマ化する（MDO）」、12、15 か月では「ILO→MDO→子が操作」と変わることが認められた。このように 8 か月頃から母親はドラマ化によってコトを生み出すようになり、子どもの mentalizing が発達していくことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reconsider the developmental origin and process of mentalizing ability from a viewpoint of a “mother-event-infant” triadic relations. Data were collected through a longitudinal observation of mother-infant interactions of 50 pairs at infant’s age 3, 5, 8, 12, 15. Results indicated that their prevailing interaction sequences were; “Infants Look at Object (ILO) →Mothers Look at the Same” at 3 & 5 months, “ILO→Mothers Dramatize Object (MDO)” at 8 months, “ILO→MDO→Infants Manipulate the Object”. The implication of these results is that mothers begin to introduce events by dramatization into interaction with their infants at 8 months and after then, infants develop mentalizing through attending at events than objects.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：Mentalizing 出来事 三項関係 インターサブジェクティビティ 乳児

1. 研究開始当初の背景
出来事 (event, incident (negative events), happenstance (good events))とは、日常の時間の流れの中で存続している全体の存在

の中で何らかの原因によって区切られた部分を指す(Davidson, 1980; Zacks & Tversky, 2001.)。区切られたとは、ある時点で知覚された事象がそれまでの全体の存在から何ら

かの落差を持つ新たなもの、ないし、不連続なものとして差異が知覚されたことを意味する。眼前で進行する活動を知覚し、概念化する際に、知覚システムは次に何が生じるかを予測するが、予測がはずれ、意外性が生じると、そこに出来事としての分節が知覚される(出来事の分節化理論)(Zacksら2007)。出来事には、物の落下、降雨、電話のベル、地震などの自然現象、物理的事象と、「ボールを転がす」、「電気を点ける」、「ガラガラを振り鳴らす」などの人為的行為の二種類がある。さらに後者には物を介したものと、「ワッと驚かす」、「抱きつく」、「突然泣き出す」、「キスをする」などの行為による出来事に分けられる。

ところで、三項関係の発達、他者の内面の読み取り、情動・行為の共有に関するこれまでの研究は、第二次インターサブジェクティブティ(以下ISと表記)(Hobson, 2002; Trevarthen, 1993; Trevarthen & Hubley, 1978)、共同注意(以下JAと表記)(Carpenterら, 1998)として記述されてきた。それらからは、一様に、生後9~12か月頃に急速に乳児は「自己-他者」の二項関係でのやりとりから「自己-他者-対象」の三項関係でのやりとりに移行することが明らかされている。とりわけ、Tomasello(1999)は、乳児が9か月頃にJAを示すようになることは、乳児が他者を心を持つ存在として捉える人間独特の力の突然の出現を示唆するとして「9か月革命」と名付けている。

しかし、これまで研究で用いられてきた方法論では、第三項に静的物理的対象が当てられてきた。たとえば、他者が視線を向けている事物を乳児が見るか、あるいは自分が見ている事物に他者の注意を向けられるかというように。だが、私たちがあつた事象に注意を向けるのはそこに何らかの出来事を見出したときではないだろうか。そして、他者が何かを見ている場合には、単に「何を見ているのだろう」「なぜ見ているのだろう」「何かあつたのだろうか」というようにその場の出来事を知ろうとするだろう。また、出来事には他者の行為から引き起こされた人為的なものも含まれる。例えば、他者がコップにジュースを注いだが、外してこぼす場合のように。行為者の意図の読み取りが不可欠なのは、まさにこのような場合だといえる(Meltzoff, 1995; Poulin-Duboisら, 1996)。

Poulin-Duboisによれば(Poulin-Duboisら, 1996; Rkinson & Poulin-Dubois, 2001)、最初の誕生日頃には、乳児は自然現象と人為的な出来事とを区別し、後者により注目と情動表出を向けるという。また、遊戯的からかいの研究(Nakano & Kanaya, 1993)や親の独得な動作である motionese 研究(Brandら, 2002; Noro & Nakano, in press)からも親の

文脈の差異を生み出すような行為、すなわち、人為的出来事には0歳後半の乳児が選好、好意的な情動を示すことや、Reidら(2006)によれば、3か月児でも複数の光点で表した人の行為パターンを分節化させて、でたらめな動きから区別できるという。しかしながら、これまでのところ、ほとんどの研究が「自己-他者-静的な対象」パラダイムに従い、「自己-他者-出来事」、とりわけ「自己-(他者-出来事)」というパラダイムでの検討は手つかずのままとなっている(Nakano, 2004)。さらに、Amano & Kezuka(2006)は4か月頃に乳児は親の顔を見るより玩具を操作する手の動きに注目し始めることを見出しているが、この結果は発達初期から乳児は関わり来る他者が生み出す出来事に関心を持っていることを示唆しているし、Legerstee(2002)も生後半年までには物と人へは異なる期待を持つことを明らかにしている。この視点に立てば、三項関係は0歳の終わり頃に突如として出現するのではなく、「自己-他者(出来事)」文脈での対象共有から「自己-(他者-出来事)」でのそれへと漸進的に発達をしていくのかもしれないと予想される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第三項が物理的事象の場合と人為的出来事の場合に他者への注目、情動表出に違い、月齢差があるかを乳児で検討することである。したがって、本研究の目的の第一は、「自己-他者(出来事)」の二項関係から「自己-(他者-出来事)」の三項関係への移行過程に注目をすることで、Tomasello(1999)の「9か月革命」に代表されるこれまでの三項関係および mentalizing の出現過程を再検討することにある。つまり、三項関係の第三項が従来の“モノ”ではなく、“コト”である場合もあり得るだけではなく、それが人為的な出来事の場合にこそ、その行為者の意図の理解が必須だと考えると、モノの共有よりも先にコトの三項関係が発達するだろうと予想される。

また、Ikegami & Iizuka(2003)がJAを、目的に達するための道具的JAと、一緒に夕日を見る場合のようなJA自体を目的とする情動的JAとに分け、Striano(2006)も同様に情報を得るためと安心をするためのJAの存在を示しているように、また、Yaleら(2003)は、母親とのやりとりの際に乳児は情動表出と発話、注視は連繫させるが、発話と注視の連繫は6か月でも偶然の域を出なかったことなどが示唆するように、情動表出が対人交渉の先駆けであり、かつ中核となり、その枠組みに発話や注視が加わって、乳児の mentalizing 能力が形作られていくと考えられる。したがって、出来事に伴うポジティブな情動のコミュニケーションが、

mentalizing 能力の発達を支えているのではないかと思われる。この点を確認するのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 協力者

S市のプレママ・パパ教室の参加者に呼びかけて同意を得た50名の妊婦が出産後、子どもの月齢3、6、9、12か月時点での親子のやりとりを観察する縦断研究に参加した。全月齢で参加したのは42名で、各月齢、それぞれ、45、48、45、48、44名が参加した。

(2) 観察方法

家庭での母子のやりとりを母親自身が撮影をする「ビデオ育児日記法」によった。

(3) 分析方法

表-1 分析カテゴリ

	CATEGORY	内容
I N F A N T	LOOK AT M	母を見る
	LOOK AT OB	物を見る
	POS EMOTION	母親に機嫌のよい発声/表情
	NEG EMOTION	母に不機嫌/拒否の発声・表情
	REQUEST	母に呼びかけ・要求
	FOLLOW	母の発声・要求に応じる
	MANIPULATION	物をいじる
	MOVE	対象を目指して移動
M O T H E R	LOOK	子を見る
	POS EMOTION	子に陽気な表情・声かけ
	NEG EMOTION	子に不快・禁止の表情・声かけ
	REQUEST	子に要求・指示
	REPLY	子の要求に応える
	PLAYFUL	子を笑わせるジェスチャー・発声
	DRAMATIZE	ストーリー化して子に物を操作してみせる
I & M P A S S		物の受け渡し

(2)で得られた映像資料について、母親が子どもに向けて出来事を創り出したときに乳児が「母を見た」か「物を見た」かの瞬間の前後15秒ずつ、計30秒を一つのエピソードとして抽出し、分析対象とした。

ここで、「出来事」とは次の条件を満たす場合を言う

- ①母親の行為が、その時点の前後で不連続である。つまり、それまでとは落差を持つ“新しい”行為を子どもに示した場合を言う。
- ②全体の時間の流れの中で、区切られた部分であること。区切られたとは、前後の行為とは知覚的印象として差異を感じる場合であり、一瞬で終わる場合も含めて、前後の行為から独立をしている場合である。
- ③出来事は、母親の連続した行為の反復から生み出される子どもの「次に生じることへ

の期待」が、母親によって意図的にはぐらかされた場合、つまり、“ずれ”を創り出した場合にも生じる。

④出来事は、子どもがその現象を知覚したときに生じる。換言すれば、子どもが注意を向けない場合には、母親の行為は空振りとなり、出来事とならない。

(4) コーディング・カテゴリ

母子の行動は、1秒単位で表1に掲げてあるカテゴリに分類した。

(5) 信頼性

ランダムに選んだ100エピソード(27.3%)について二人のコーダーの一致率は、77~89% ($\kappa=76.7$)と十分に高かったので、残りの部分は一人のコーダーが単独で行った。

4. 研究成果

(1) 母子の主な行動の出現頻度

観察された母子の行動は、表-1に示した行動カテゴリに分類され、それぞれのカテゴリについて、1エピソード当たりの出現頻度が算出された。その結果、図-1(a)に示されているように、乳児では、8か月頃を境として、物・母を見る行動から母の動き(手の操作)を見る、物を自分で使う・操作するようになることが見出された。

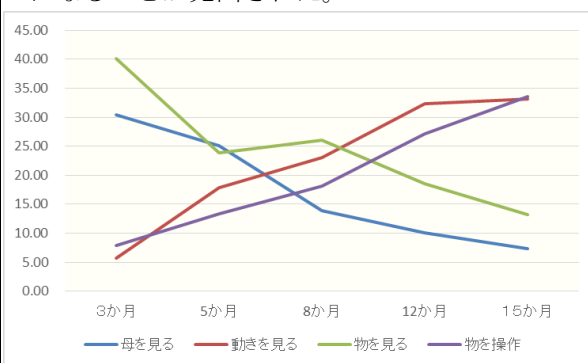


図-1(a):乳児の主な行動の出現頻度

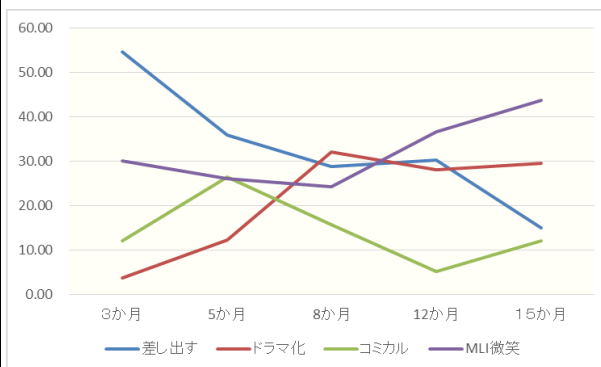


図-1(b):母親の主な行動の出現頻度

一方、図-1(b)に示されているように、母親は、3か月では子どもに物を差し出す頻度が他の月齢より高いが、次第に減少をしていく。興味深いことは、母親のコミカルな行為は5か月をピークとする逆U字型で、8か月から

は、物をドラマ化して示す行為の頻度が上昇している。つまり、母親の子どもへの働きかけは表情・ジェスチャーで子どもを笑わせようとする2者関係から、物を用いて虚構世界を構成しようとする3者関係へ8か月頃から移行していくことが示唆される。なお、母親は、一貫して微笑みを伴って、子どもを見守っていたが、ドラマ化の導入と共に、その出現率は上昇へと変化したことも示唆される。

(2) コトへの乳児の反応

表-2 母が示した出来事に注目した割合

月齢	3M	5M	8M	12M	15M
母を見る	37	43	54	48	44
物を見る	36	32	30	24	18
母比率	50.7	57.3	64.3	66.7	71.0

母親が子どもに、単に、「モノ」を示すのではなく、音を鳴らす、おどけた仕草・発声でおもちゃを動かして見せるなどの、「コト」を示したときに、乳児はモノを見るか、母親（コト）を見るかを分析した結果を表2は示している。結果から、月齢と共に、モノよりも、母の方、すなわち、母親の動作、表情に注意を向けるようになる ($\chi^2=107.92$ $df=4$, $p<.001$) コトが示唆される。

(3) 主な母子の行動連鎖系列

各月齢で最多となった母子のやりとり系列を抽出し、各月齢での出現頻度を比較した。ここで、行動連鎖系列とは、乳児が母、または物に注目し、それに母が応じ、さらに乳児が反応するという行動の流れをいう。

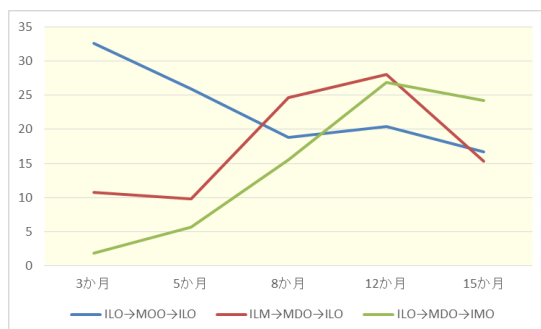


図-2：主な母子行動連鎖系列の出現頻度

(ILO 乳児が物を見る MOO 母が物を差し出す ILM 乳児が母を見る MDO 母が物をドラマ化して示す IMO 乳児が物を操作する)

結果から、発達初期(3, 5か月)では「乳児が物を見る→母がそれ(物)を差し出す→乳児がそれ(物)を見る」という行動系列の出現頻度が高いが、8か月からは、「乳児が母を見る→母が物をドラマ化して示す→乳児がそれ(物)を見る」という行動の流れが中

心となることを見出された。しかし、15か月になると、この行動系列は「乳児が母を見る→母が物をドラマ化して示す→乳児がそれ(物)を操作する」に主役の座を譲り渡すことになる。

以上の結果から、親は、発達初期ではコミカルな行動で、子どもと「コト」によるやりとりを楽しみ、8か月頃からは、物のドラマ化によって、新たな「コト」の世界へと子どもを導いていくのではないかと考えられる。

かつて、Bruner (1983)は、母子の手遊びや伝統的ゲームを「言語獲得支援システム」と呼んだが、言語の獲得には、単に語彙を知るだけではなく、語用、つまり、他者がどのような意図を伝えようとしてその表現を用いているかの読み取りが必要と言えよう。したがって、他者が見ている物を同定して注視する従来の“静的な”共同注意以上に、母子の手遊びや伝統的ゲームが創り出す「コトの世界」の共有は mentalizing の発達により有効であるだろうと想定される。実際、本研究の結果は、子どもの月齢8か月頃、すなわち、Tomasello (1999) のいう「9か月革命」の直前に、親はドラマ化を導入し、子どもも物を見るから、操作するに変わっていくことを明らかにしたが、このことは、共同注意の発達が mentalizing の発達と関わるとしたら、モノの共有ではなく、コトの共有であるコトを示し、この視点からの発達の見直しが必要と言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

中野 茂、生涯発達心理学研究、白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要、査読有、第5号、印刷中

〔学会発表〕(計 3件)

- ① 中野 茂 Intersubjectivity と Attachment、日本発達心理学会 23 回大会、2012/03/10、名古屋国際会議場
- ② 中野 茂 遊び研究の現在、日本発達心理学会 24 回大会、2012/03/16、明治学院大学
- ③ Nakano, S. Events and mentalizing in infancy: From the “person-thing-person” to the “person-event-person” joint attention. The 16th European Conference on Developmental Psychology. 2013/09/06. Lausanne, Switzerland.

〔図書〕(計 2件)

- ① 中野 茂 遊び 田島信元他(編)発達心理学ハンドブック、福村出版、印刷中

- ② 中野 茂 遊び研究の現在 小山正高
他（編）遊びの保育心理学 川島書店、
印刷中

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 茂 (NAKANO SHIGERU)

北海道医療大学心理科学部・教授

研究者番号：90183516